

持たないと言はれる。そこにSが出て来て頻に湯加減を賞美する。自分も急に入りたくなつて代り合つて浴びることにする。好い氣持になつて上つて來ると、Tが頻りに須彌山の話をして居る。どうしたはづみでそんな話をして居るのかすつかり分らないが、當人は極めて愉快さうだ。巴里まで來て、宿屋に泊り込んで、狭い部屋に閉ぢ籠つて、ビールを飲んで正月の晩を、昔讀んだ須彌山談に過すなど一寸妙な有様だがFさんもSも尤もらしい顔をして、相變らずビールや蜜柑を相の手にして聞いて居る處を見ると自分が風呂に入つて居る間に、話は極めて自然に須彌山まで上つたものらしい。

行かうじやないかとSが急に思ひ出したやうに言ひ出したが、湯上りのポーツとした氣分には、これからまた大使館まで出かけて、變な様子を見る氣には成れないので、ウーンといひながら腰かけてしまふ。折角着換へたのだから行つて來給へとFさんにも勧められたが、もう行く氣は毛頭無かつた。招待の時間はとくに過ぎてしまつて居る。この夜會でしまはうじやないかと言ひ出すと、元來行かねばならぬ程の義理があるでもなく、行つても格別面白くもないと承知して居るSの事だから、潔くあきらめて尻を据える。新に二本程抜かれてTやFさんの話に間隙が出来るやうに成つたのは十一時頃であつた。結局只の風呂に入る爲に燕尾服を着て來たことに終つてしまつた。

終日春を求めて春を得ずに家に歸つた。勿論歸つても正月氣分などは有りやうがない。正月のない巴里に正月氣分を求めやうとするのだからもともと無理だが、無理と知るのは多くは後のことで、大概の日本の人は無理にもかうして正月氣分を求めて歩くやうだ。